

巻頭言

上振れのリスクを取る——閉塞感を打破する挑戦のすすめ——

湘南医療大学 保健医療学部 神保 洋平

作業療法の臨床現場には、多くの閉塞感が漂っているのではないかと感じています。取得単位のノルマがあり、追われるように仕事をこなす日々。仕事に余裕がなく、対象者の状況理解や作業療法プログラムを熟考できず、型にはまった作業療法介入。世の中の賃上げムードの中、なかなか上がらない給与水準。抜けていく中堅セラピスト。入れ替わるリハスタッフに対し毎年のように割かなくてはいけない教育コスト。このような中で自己研鑽をしていくのは非常にチャレンジングなことであります。日頃私が関わる学生たちは、現場の暗く厳しい話題には敏感に反応します。これからの世代を育成する立場にある身としては言葉を慎むだけでなく、明るい未来を示す存在でありたいと考えています。

このような閉塞感はどうすれば打開できるのでしょうか。ここで「リスク」について考えてみたいのです。多くの人はリスクと聞いて想起するのは失敗のことだろうと想像します。しかし、この捉え方は片手落ちです。リスクの本来の意味は「不確実性」です。未来は不確実であるからこそ、悪い方向にも、良い方向にも向かう可能性があります。それが「リスク」という言葉の本来の意味です。そう考えた場合、下振れのリスクを最小限にしつつ、上振れの可能性に賭けることが、一つのヒントになるのではないのでしょうか。

下振れが少なく大きな上振れのリスクを取ることの最たる例は、学会発表です。学会発表は日頃の実践の取り組みや研究の成果を発表するだけでなく、同じ問題意識や興味関心を持つ人達とのコミュニティ作りの場でもあります。自らの取り組みを通じて出会った方々は、貴重な人脈となります。同じ悩みを共有できる仲間や建設的な助言をくれる先輩方にも巡り会える可能性を持っています。時に手厳しい指摘を受けることもあるでしょう。受け止めるのに時間がかかることもあります。しかし、そのような手厳しい指摘ほど自分をレベルアップさせてくれるものです。また、口述発表の場で上手く発表できないことや質疑応答に答えることができない失敗体験とも思えることもあるかもしれませんが、しかし、いかに失敗しようとも聴衆の記憶には残りません。つまり下振れのリスクは極めて小さいのです。

同じ仕事を同じように続けていけば、失敗の可能性も減りますが現状が改善する可能性もありません。新しい可能性に開かれたリスクを取ってみませんか。その行動のひとつひとつが、自分自身の仕事を充実させ、現状を開くヒントを見出すことにつながっていきます。